婦人宣教師、ミセス・プラインの

「おばあちゃんの手紙」(4)

～アメリカン・ミッション・ホームの創立者の一人～

小林　恵子

★アメリカ・ミッション・ホームの開設

一八七一（明治四）年八月二十八日、三人の婦人宣教師たちは横浜山手の居留地、四八番館でアメリカン・ミッション・ホーム（亞米利加婦人教授所）を開設した。このホームは混血児の子どもたちの養育と女子教育機関の設置を目的とした家庭組織の塾舎であった。リーダーのミセス・プラインはこのホームの総理を、ミセス・ピアソンは校長を、ミス・クロスビーが会計を担当した。

最初は生徒が集まらず、混血児も日本の少女も来なくて三人は当惑したのであった。当時は切支丹禁制の高札が日本全国に立てられ宣教師たちをバテレンと呼んで恐れていた時代である。ホームに最初に入ったのは横浜に駐屯していた米国連隊の将校の子どもたちで、母親が亡くなり大酒飲みの父親のもとに残された二人の幼い姉妹であった。「おばあちゃんの手紙」の三（八月二十六日）にはこの姉妹（キャリーとアニー）のことが書かれている。ひどい台風でお祈り会ができなかった朝、幼いキャリーが祈っている姿にどれほど励まされたかわから

ないと記している。

★ ホームの生徒募集広告を書いた中村正直

生徒が集まらず困っていたおり、このホームに滞在し生徒募集広告を書いたのが中村正直（敬宇）である。彼は旧幕の儒者で米国に留学し、西洋文明の根本にあるキリスト教にふれ、極めて進歩的な見解をもっていた。留学中、米国の母親の知識や教養の高いのをみて日本の母親をかえりみ、女子教育の必要を痛感していたのである。後に東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学。明治八年創立）の摂理（校長）となり、日本で最初の幼稚園（国立）東京女子師範学校附属幼稚園（明治九年十一月創立）を創立する建議者として尽力した。女子教育、幼児教育の礎をきずいた恩人である。彼がこのホームに滞在したのは『西国立志編』を著して三か月後のことで、静岡学問所に招聘されたE・W・クラークが明治四年十月二五日に来日するのを迎えるため横浜に行き、このホームに十日ほど滞在した。ここで婦人宣教師たちが子どもを世話する姿―厳しい躾と真に子どもを愛する態

No 48
on the Bluff

亜米利加婦人教授所横浜山ノ手ノ告示

馬利・普拉延
如利亜・吉羅士倍
果・斯・比爾 選

MARY PRUYN.
Superintendent.
JULIAN. CROSBY
LOUIS PIERSON.
Assistants

コノ教授所ハ、亜米利加婦人伝道会社ニテ設クルトコロニシテ、日本人、外国人ノ差別ナク、ソノ父母ソノ児子ヲ教養セント欲スルモノアラバ、コノ教授所ニテ引受ケ世話ヲ致ストコロナリ。

三歳以下ノ小児ハ、引受ケザル事。但シ母ナキモノハ、引受クベシ。

凡ソ小児、入塾ナリトモ、通稽古ナリトモ、ソノ意ニ任スベシ。然レドモ入塾ノ方、小児ノ為メニ、益アルベキナリ。

モシ小児ノ母、衣服洗濯等、ソノ外ノ事マデモ、一切世話ヲ頼ミ度バ、女教師コレヲ引受クベシ。

モシソノ父、ソノ小児ノ来ランコトヲ欲セバ、ソノ小児親ノ許ヘ省問スルヲ得ベシ。

モシソノ父母、教授所ニ来リ、ソノ小児ニ逢ハント欲セバ、午後第四時ヨリ、第五時マデノ間ナルベシ。病気ノ時ハ、何時ニ拘ラズ見舞ニ来ルベシ。

教授及ビ食物、居住ノ費用トシテ、毎月十元ヨリ十五元マデヲ出スベシ。

通稽古ノ者ハ、毎月四元ヲ出スベキ事。

会社ニテ、コノ教授所ノ、百事便利ニテ且ツ有益ノ功効アルベキヤウニト心ヲ尽セリ。日本人、外国人ノ差別ナク、懇意トナリタル人ハ随意ニ訪問スベシ。コヽニ居ル小児ハ、実母ノ如キ親愛ノ心ヲ以テ、万事ニ心ヲ付ケ、世話ヲ受ルヲ得ルコトナリ。

ソノ他、委細ノ事ハ、コノ教授所ニ来リ、教師ニ逢フテ、問ヒ給フベシ。

余十余日、コノ教授所ニ寓セリ。コノ三ノ女教師、何モ親切懇篤ナル人ナリ。現今小児四人アリテ、教師ノ世話ヲ受テ居レリ。実母実子カト疑ハル、ホドニ、相親和親愛セリ。一ニハ、知慧生長スベク、二ニハ身体強壮ナルベシト思ハル、ナリ。世ノ父母、モシソノ児子ノ善キ教養ヲ受ント思フモノ、コノ教授所ニ託シ置カバ、イカバカリカ、ソノ家ニテ育ツルヨリハ善カルベキナリ。

明治四年辛未十月　　中村正直識

NAKAMURA

（原文は横浜市百年史編纂所蔵）

度一に心うたれ、生徒募集を書いた。彼がよほど心を動かされたらしいことは彼の妻と自分の娘や一族の娘三人をホームに託した事から理解できる。[註1]

この広告がだされた後、ホームに学びたい人が増え「おばあちゃんの手紙」五にあるように断らなくてはならないほどとなり、建物が狭くて困る状態となった。同年クリスマスには入塾の子どもは十八人（このうち混血児は十四人）通学の女生徒は二十人ほどになった。

★ 幼稚園の濫觴

先の広告文をみると、「日本人、外国人ノ差別ナク」世話し「現今小児四人アリテ」と小人数であるが混血児の養育が始められている。また、「三歳以下ノ小児ハ引受ケザル事。但シ母ナキモノハ、引受クベシ」とあり、教育と福祉の両面の機能をもつ施設を考えていたことも理解される。婦人宣教師たちの子どもへの接し方が「実母実子カト疑ハルルホドニ」に親しみがあったことは、「おばあちゃんの手紙」五の最後に記されている詩からもわかって預けると思う。亡くなったわが子と同じ名前をもつエディーとアニーの詩は、ホームの子どもを我が子のように思って育てている婦人宣教師の姿勢がよくいあらわされている。このホームを津守真氏は「幼稚園の濫觴」と『日本幼児保育史』第一巻で書いておられるが、[註2] この施設が人種や貧富の差をこえて開設された幼児保育の先駆的なものであったことは特筆されてよい。また、このホームに深くかかわった人々から幼児教育の草分けとなった先駆者を多く輩出したことは興味ぶかい。日本で最初の私立幼稚園を創立した桜井チカ（桜井女学校附属幼稚園）や児童福祉事業の先駆者、二宮ワカなどはこのホームで婦人宣教師に学んだ生徒たちであった。

★ ミッション・ホームの祈禱会と関信三

「おばあちゃんの手紙」五に日本人による初めての祈禱会がこのホームで行われたと記されている。日本の歴史で初めてとあるのは疑問であるが、ホームではジェームズ・バラ宣教師の指導で聖書研究会も開かれ、ここでの祈禱会が原動力となり「日本基督公会」（現・横浜海岸教会）が一八七二（明治五）年に設立された。興味ぶ

かいことは、この祈禱会につらなり最初にバラ宣教師から洗礼を受けた人々のなかに安藤劉太郎、のちの関信三の名前があることである。彼は後に東京女子師範学校附属幼稚園の初代園長として活躍し、松野クララの講義の通訳をつとめ、『幼稚園創立法』『幼稚園二十遊戯』などの書を翻訳、著述した人である。彼は当時、仏教の弾正台派遣の耶蘇教探索の諜者として婦人宣教師たちと接していたのであるが、後に幼稚園教育に転じた事は興味ぶかい。ホームで子どもたちをみていた事も後の彼の生き方に何等かの影響を与えたのではなかろうか。諜者として装って洗礼を受けたことは卑劣な行為ではあるがそこには時代と立場の違いがあり、後世になって見れば、彼の当時の報告は横浜公会の実情を正確に報道している貴重史料となっていると井上平三郎著『濱のともしび―横浜海岸教会初期史考』に記されている。[註(3)]

五、アルバニーの第一改革派教会の日曜学校の先生と子どもたちへ

横浜　一八七二年一月七日

親愛なる皆さまへ

私たちが日本へ向けて旅だったときには皆さまにお話ししたように小さい子どもたちのために働くというのが目的で、そのつもりで日本にやって来ました。でも今は、神が私たちに与えて下さる仕事をなんでもしようと考えています。いろいろと仕事は山のようにあるのですが最初の目的とは少し違ってきたのです。神が本当にこれらの仕事をするように私たちに命じておられるのかどうか確信がもてなくなるときには不安になってしまいます。子どもたちのための仕事以外の仕事が次々と私たちにおおいかぶさってくるのです。このホームを始めてまだ四か月しかたたないのに、今では信じられないくらい多くの気の毒な異教の人々が英語を教えてほしいとやってきます。私たちの一人（ミセス・ピアソンをさしている）は日本語がかなり上手になり、英語と日本語をちゃんぽんに使いながら彼等に教えることができるようになりました。三十人以上もの男の人や女の人、少年、少女たちが毎日のように来ますし、それと同数以上の人々を無理にでも断らなくてはなら

ない状態です。聖書について学びたいと言って来る人々を断るのはとてもつらいことです。でも、人間の力には限界があって私たちの仲間のひとり、ミセス・ピアソンがやっている以上の仕事はとてもできません。

そこで、私たちみんなが感じていることは、ここで最もやりたいと思っていること、つまり私たちに最もふさわしい仕事を女性と少女の教育に限ったらどうかということです。

それに、私たちのホームの建物は大きな学校には全くむいていないのです。そこでこのさい、より良い仕事をするためにもっと大勢の生徒が収容できる施設が欲しいのです。親愛なる皆さん、是非この目的のために援助していただきたいのです。私たちが必要としている土地や建物を手にいれるためには莫大なお金が必要です。でも私たちが願っているような施設を手にいれることができれば現在ここで行っているよりもずっと多くのことが出来るのです。今のところ、何人かの少女や若い女性からの申し込みがありますが部屋が無いため断らなくてはならないのが現状です。

それから、私たちがもっと必要としているのは教師なのです。日本語を学ぶことのできる婦人宣教師を何人か派遣して欲しいと願っています。日本の政府は近々、法律を改定し（キリスト教禁制の高札を撤廃することをさす）、人々が罰せられることなく学べるようになりそうなので、その時に備えて人々を教えることができるよう準備しなくてはなりません。政府も法律改正は早晩やらなくてはならないでしょう。人々は現在の法律が間違っていることを感じており、もうこれ以上は我慢していないでしょう。大胆で勇気のある人々は現状を無視して、正しいありかたを求め歩もうとしています。でも、まだ多くの人々は臆病でひそかにその時が来るのを望みながら待っているのが現状です。宣教師たちやクリスチャンの人々は宗教が自由（明治六年二月、全国キリスト教禁制の高札を撤去）になることに備えて準備することがとても大切だと感じています。この

ためにより多くの宣教師がこちらに来て日本語の勉強をしておく方がよいと願っています。それから皆さんたちに是非お伝えしたいことがあります。数週間まえから日曜日の夜に私たちのホームに集まってくる数人の日本人によって祈禱会が始まったことです。最初は讃美歌を習うために集まったのですが今では一緒に祈禱をし熱心に励ましあうようになりました。これは日本の歴史からみて初めてと思います。しかも、そこには日本の女性も出席しています。

また、忘れてはならないのは、このホームに毎日学ぶために来ている人々はみんな「主の祈り」を学び、この学校が始まるときに唱えるのです。もっと良いことは何人かの生徒は彼等のためにお祈りの言葉を宣教師に書いてもらいそれを日本語に翻訳して自分の家で祈りを捧げていることです。

ここで皆さんたちにこのホームで私たちと一緒に暮らしている可愛い幼い子どもたちのことをお話ししたいと思います。今、子どもたちは五人いますがこの子たちは救い主について何もしりません。お祈りや讃美歌や聖句について教えられたことがなかったのですが今では口にだして言うようになりました。それを聞くことは私にとって大変嬉しいことです。きっと皆さんも同じように喜んでくださることと思います。このホームに入ってまだ三か月にもならないのにこの小さな子どもたちが「There is a happyland」や「Jesus loves me」（主われを愛す）の讃美歌を歌うことを覚え食事のとき、お祈りすることに参加しているのです。毎日、朝と晩、子どもたちは短いお祈りを唱え、そのうえ「天にまします我等の父よ」（主の祈り）を一生懸命に唱えようとしている姿をみたら皆さんたちも私たちと同じように神を讃美せずにはおれないと思います。

先日も私たちの小さな女の子が、エディーという男の子が自分たちの部屋で声をだして一緒にお祈りをしようと言いだして毎朝、順番にお祈りしていることを話してくれて私はとても嬉しくなりました。

故郷、アルバニーの我が家の墓地に小さな墓石が

あって、そこに亡くなった子ども〝エディとアニー〟の名前が刻まれています。私がここではじめて面倒をみることになった二人の異教の混血の子どもたちが偶然にも同じ順序で同じ名前がなづけられていることは不思議なことではありませんか。この子たちは私の愛する子どもたちなのです。

私の亡くなった愛するふたりの子どもはもうすでに私の世話を必要としない学校（天国）へいきました。そこでは、キリストご自身がすべてを支配し守ってくださっています。

神がこれらの小さな子どもたちを養育するよう、私に贈って下さっているのだと信じます。この子どもたちが最初に習った英語の言葉〝God is Love〟（神は愛なり）を何度もくりかえして発音するのを聞くことは私にとって大きな喜びです。

親愛なる皆さま、私がこれまで述べてまいりましたことは十分おわかり頂けたことと思います。この国の人々に神の福音を述べ伝えること、神を恐れ、神の愛を知るため大勢の人々がここで学ぶことができるよう、ふさわしい建物を建てることは私たちの責任であり特権です。どうか皆さまに判っていただきたいのです。

主に仕え、いつも皆さまと共にある

メアリー・プライン

（国立音楽大学）

註

（1）『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園　一九九一　43頁

（2）津守真「外国人の始めた『亜米利加婦人教授所』」日本保育学会著『日本幼児保育史』第一巻　フレーベル館　一九六八　44—49頁

（3）井上平三郎著『濱のともしび—横浜海岸教会初期史考』キリスト新聞社　一九八三　173頁